

名古屋 開府400年

老舗探訪

東海企業ウォッチング

カーシート、CNT：時代開く新技術

茶久染色

一九一六年創業

一宮市

創業から60年以上にわたりはなかった。かつて染めを専業にしてき 糸を束ねた時、断面で色茶久染色は、1980年 合わせをする。だが、実際にカーシートの染色に乗り 断面より断面の方が濃く出した。自動車産業の発展 見えるため調整は困難を極に伴い、受注は着実に増え めた。さらに紫外線に強い、だが、技術の確立は容易で 難燃性を持たせた染色加工

創業から60年以上にわたり、さまざまな糸染めを手がけてきた。その技術はカーシートで開花した

歩み遅くとも進取の気性

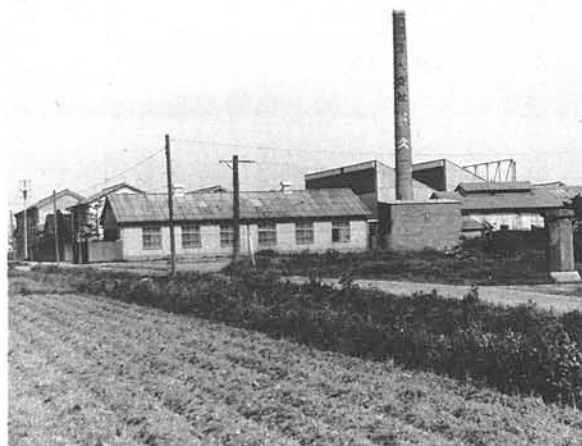
4代目 今枝 憲彦さん

染色が大きく変わる環 境下、従来と同じ経営手 法では先細りしていくだ け。糸にこだわらず、染

あくなき探求心 染められる物は 何でも染める

を自動車メーカーから求められた。こうした厳しい課題を克服して、新たな柱へと育て上げた。順風だったカーシートも90年代後半にさしかかると、受注量は下降線をたどりだした。低迷する衣料需要も重なり、新たな染色分野の開拓が欠かせなくなつた。対策として、09年にカーボンナノチューブ(CNT)を使用した新繊維をクラレリビング(大阪)などと共同で開発。CNTの導電性に伴う発熱機能を生かした布帛(ふはく)の活用を始めた。「CNTを銅線と同レベルの伝導率まで高め、従来より軽い非金属の電線を作り上げる」。これが今枝社長が描く夢だ。カーシートで蓄積してきた染色技術を生かし、非繊維、新分野で開花させる。時代を読み、一歩先を行く。これが創業来の遺伝子かもしれない。

メカ好きも基盤作りに役立つ



昭和40年代の本社工場外観

工場増設で業績右肩上がり

ウール産地として染色工場が軒を連ねた旧一宮市で、かせ染めを始めたのが同社の始まり。戦後も繊維市場の拡大に伴い、1970年から、かせ染めからチーズ染めへと少しずつ転換していった。「わしは、歩みの遅い亀だが、今にチーズ染めは、かせ染めに比べて風合いやストレッチ性に劣るものの、糸の密度が高いため染色機に大量の糸が入られ、生産性が高いことで知られ

る。現社長の父親で3代目、茂雄氏がメカ好きだったこともあって80年ごろから、尾州地域で廃業した染色工場の設備を格安に手に入れた。85年には本社工場の増設を終え、手に入れた多くの設備を配置して大量生



手した時、色合わせが、これほど難しいとは思わなかった。試行錯誤を繰り返すうちに、ようやく技術を確立した。そのおかげで売り上げを伸ばすことができました。新しいものを探求する現在の、新しいものを染める技術開発が欠かせない。経営理念にある「感謝の心を込めて彩り」と快適さを社会にお届けしたいと考えています。